九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治期福岡地方石油史（五）：石炭油から石油へ

入江，寿紀
西日本鉄道

https://doi.org/10.15017/13634

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 7, pp.84-92, 1976-10-15. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

明治期福岡地方石油史(五)

――石炭油から石油へ――

入江寿紀

目次

初めに

一、石炭油から石油へ

(一) 臭水から石炭油へ

(二) 石炭油から石油へ

(三) 取締規則制定と品質の向上

(四) 事故と公害

（以上、3号）

二、用途の多様化

(一) ランプ

(二) 街路灯

(三) 熱用としての石油

(四) 駆虫用としての石油

(五) 陸用石油発動機

(六) 船舶用と機関車

(七) 自動車

(八) 機械油、外

（以上、5号）

三、販売店と製油所

(一) 国産油と輸入油

(二) 明治中ごろまでの石油販売

(三) 露油全盛時代

（以上、6号）

(四) 市況の起伏とスタンダードの勢力拡大

(五) スタンダードの九州市場独占

(六) ライジングサン西戸崎製油所設立

(七) 販売政策と市況

（以上本号完）

(四) 市況の起伏とスタンダードの勢力拡大

明治二十八年（一八九五）に高騰した石油価格（参照前項）は、二十九年には不振に喘ぐようになる。その原因は、内外石油供給量の増加にもあると思うが、ほぼ経済界の景気の起伏に合致しているようだ。事実その後石油業界は、同年十二月末から急激に価格を回復するが、その波は完全に景気の波に一致する。その時の石油価格上昇の状況は、明治三十年（一八九七）一月七日の〔福岡日日〕の記事を挙げて説明に代えよう。なお同文は、カタ仮名の読み仮名以外はすべて原文のままとした。

◉石油初荷の盛況、強弱の見込　石油は舊臘中甚だ不振の成行なりしも年末に押詰りてより大に好況を呈し其相場はタンク、米油とも二三銭方を引締め目下横濱市中の取引相場はチヤスタ二圓十八銭より十九銭、ホーキ二圓十四銭より十五銭、タンク二圓二十三銭より二十四銭、イカリ二圓四十銭等にして各地方とも都て買控への人気なりしも俄に非常に買進み去る四日の初荷の如きは石油輸入以來未曾有の大多数を出荷し其額はチヤスタ一萬九千三百四十八函、ホーキ四千七百三十三函、イカリ千三十函、タンク二千七百三十二函合計二萬七千八百四十九函なりしと云ふ

この時の好況も長くは続かず、春にはふたたび不振となり、同年十二月には、東京株式市場の恐慌に即応するように、石油価格も暴落した。その状況を、十二月二十一日の〔福陵新報〕は次のように伝えている。この時の暴落は、次の記事からも分かるように、スマトラ油の横濱入荷が引き金とはなっているが、真犯人は不況による需要激減にあったものと思う。なお次の文も、すべて原文のままとした。

◉タンク油の暴落　スマタラ油はタンク油の一大敵品なるがスマタラ油が曩に横濱に入港せし當時はタンク油の方一箱に付十二三錢も高かりしがスマタラ油の賣行宜しき處よりサミュルサミュル商会は大に警戒を與へ居りたるに第二回として不日スマタラ油は相場大いに引落し一圓九十一錢となしたるもスマタラ油は依然一圓九十五錢にて待合居れりといふ

以後中央での石油市況は、景気の変動に従って価格の上下を繰り返えし、九州では、都市からの遠近に応じた時差をもってこの変動を受けとめる訳だが、その時差は一、(二)「石炭油から石油へ」の項で述べた流行の時差が、ある程度推定の参考になるのではないかと思う。

また二十九年（一八九六）ころから、新い外油も目立つようになる。二十九年十二月二十日の〔福岡日日〕には、神戸市兵庫宮内町・米穀問屋兼仲買業・曽根忠兵衛商店が、ランカット・ローヤルダッチオイル商会から新規に石油を輸入、「王冠印石油」として発売した旨広告を出しているし、「スマトラ油」の記事が初めて新聞紙上に現れるのも前述の三十年十二月からだ。

会社組織の石油販売会社が福岡地方に登場するのも、二十九年五月が最初のようだ。その会社内容は、同月二十七日久留米区裁判所への登記によれば次のようになっている。

△社名、久留米石油合資会社△営業所、久留米市通町一二二ノ二△目的、石油販売ノ営業△資本、一二、〇〇〇円△設立、五月二十五日△業務担当社員、野田儀市（久留米市通町一三〇。四千円出資。有限責任）△社員、（外に）、国武喜次郎（同町一六九。四千円出資。有限責任）、松山松次郎（同市米屋町二二。四千円出資。同上）

右の中業務担当社員野田儀市は、前項で述べた大阪露油筑後特約販売所・野田儀八と住所が同じ上に名前の内一字が同じなので、親子か兄弟ではないかと思う。また、社員中の国武喜次郎も、二十八年五月家業の糸店の外に石油卸しを兼営（参照前項）しているので、おそらく両石油卸商が合併して規模を広げたのではないかと思う。但し、取扱い石油がどの会社なのかは分からない。

また、三十三年二月には、日米礦油合資会社若松出張所が設立〔明治大正小倉経済年表〕されているそうだ。

このような中で三十一年（一八九七）に米国スタンダードが、その資力に物を言わせて露油に販売合戦を挑んでいることが目を引く。この販売合戦の結果、露油は日本での勢力を失っているようだ。次に挙げるのは、このことを報道した同年二月二十日の〔福岡日日〕の記事である。

◉米露油の競争と大暴落　目下横濱に於る各油は五十万箱の多きに達し、商舘愈愈直段を下ぐる事となりしが、サテ斯く下落の勢を示したるは、米油の本尊なる八番舘が露油の先きを制し競争を試みる事となり、突然チャスター一円九拾二錢に、ホーキ一円九拾錢に下落せしめたるに職由（おもに、それによること）するものなり。然るに、予て米油を凌がんとする露油錨印は、今日チャスターよりも尚ほ三錢高にて如何にも落附き模様なりと雖ども、現にスマタラ油は一円八拾八錢にて賣り放ちつつあれば、露油が到底今日の直段を維持すべからざるは當然の次第と謂ふべし。而て其進んで暴落を告ぐる期も近日の中なるを以って、競争の結果愈々各油とも大暴落を来し、之が為め輸入商舘に波瀾を起すは推して知るべし。左れば商舘は人気悒悒とし、サミュール商会の如きも賣抜策に困難し居るよし。併し内商は引受くる荷物は既に取引を済ましたれば、格別の影響なしとなり。

露油との販売合戦に勝利を収めた米国スタンダードでは、三十三年（一九〇〇）十一月日本における新販売組織として内外合資石油会社（インターナショナル・オイル会社）を設立、同月十五日登記を終了した。その資本金は一千万円（一株百円、十万株）で、株主および役員は〔東洋経済新報〕三十三年十二月五日号に次のように書かれて

いる。

△株主

・ジェリアス、ウォリアム、コブマン（米国人）、九万七千八百株

・エドウォン、ダン（米国人）、五十株・ジョン、ハムモント、ファーテォグ（米国人）、五十株・隈本栄一郎、五十株・ジョンフレテリック、ラウダー（米国人）、五十株・大谷嘉兵衛、千五百株・馬越恭平、五百株

△役員

・取締役、コブマン、ダン、大谷嘉兵衛・監査役、馬越恭平

なお、当時まで米国は世界における最大の石油産出国で、一八七五（明治五年）から一九〇〇（明治三十三年）に至る灯油輸出額は次のようになっていた。（東洋経済新報、明治三四、七、五号による）

年	総価格 千ドル	灯油百ガロン単価ドル	年	総価格 千ドル	灯油百ガロン単価ドル
一八七五	二九、八九一	一四・一	一八八八	四七〇四二	七・九
一八七六	三二、七二三	一四・〇	一八八九	四九、九一四	七・八
一八七七	六一、四七二	一二・一	一八九〇	五一四〇三	七・四
一八七八	四六、二五九	一四・四	一八九一	五二〇二七	七・〇
一八七九	四〇〇九五	一〇・八	一八九二	四四八〇六	五・九
一八八〇	三五、九四二	八・六	一八九三	四三一四二	四・九
一八八一	四〇、一三一	一〇・三	一八九四	四一、五〇〇	四・二
一八八二	五一、三三三	九・一	一八九五	四六六六〇	四・九
一八八三	四四、九一四	八・八	一八九六	六二三八三	六・八
一八八四	四七、一〇三	九・二	一八九七	六二六三五	六・三
一八八五	五〇、二五八	八・七	一八九八	五六、一二五	五・七
一八八六	五〇、二〇〇	八・七	一八九九	五六、二七三	五・六
一八八七	四六、八二五	七・八	一九〇〇	七五六一二	七・八

(五) スタンダードの九州市場独占

前項で述べたように、明治三十三年（一九〇〇）ころまでには、米国スタンダードが日本における外油の主権を握るようになるが、一方その間日本の採油業も急速にその産額を増加、それに伴ない多くの会社が乱立して、既に明治二十五年に一一四に達している（実業之世界刊、明治大正史経済篇）。しかし、インターナショナルオイル会社設立を境として、石油事業も整理時代に入ることとなる。

明治三十四年（一九〇一）には、大隈伯爵の奨励、渋沢男爵・浅野総一郎等の勧誘によって、宝田石油会社（大正十一年日本石油と合併）の重役山田又七・渡辺藤吉の二氏が主唱者となり、三十四年末から群小採油会社・組合・個人経営礦区の買収合併を開始、明治四十年にはその数一二七を数えた。一方日本石油もまた他の採油会社を合併して次第に膨脹、明治四十年には米国スタンダードの子会社インターナショナル石油の越後における事業・財産一切を買収、越後における多くの石油業は順次宝田・日本の二会社に合併され、一応採油業者の大合同は終った。

この間三十七年、宝田・日本の両社は、等分出資の国油共同販売店（資本金五十万円）を新設、本店を越後柏崎に、出張所を東京・大阪・下関・敦賀・新潟等に置き、翌三十八年には株式会社としたが、後日本石油は同社から分離した。（工業之大日本、明治四四、一、一号）

明治四十年までの全国業界の概況は以上の通りだが、次にこの間における福岡市を中心とした石油業界の状況を見てみよう。

この時代の出来事としてまず挙げねばならぬことは、南北石油および東西石油への福岡地方からの資本参加だろう。

南北石油株式会社は、創立委員を渡辺藤吉・浅野総一郎・大倉喜八郎・林忠正ほかとし、三十九年（一九〇六）一月の株式募集広告によれば、「当会社は、既に収得ある台湾・青森・北海道における鉱区三十有余を合併し、其事業を拡張経営せんとするもの」で、石油の採掘

を主とし精製売買運搬の業を兼ねる目的で企画されている。同社は同年四月二十一日創立総会を開いたが、後四十一年宝田石油に合併された。

同社の募株に応じた福岡地方財界人には、次の人人があった。

・太田清蔵、二五〇株・渡辺与八郎、一五〇株・園田小七、一五〇株・石村虎吉、一〇〇株・中村清次郎、一〇〇株・豊田喜三、一〇〇株・太田大次郎、一〇〇株・的野作七、八〇株・渡辺渡三郎、五〇株・深川松次郎、五〇株・浜崎定吉、五〇株・小磯進、五〇株・辻音吉、五〇株・山田収、五〇株・永井胤、二五株。

また、同年夏創立が決定した東西石油には太田清蔵が発起人として参加し、博多に分工場を建設する計画さえあった。この分工場は結局実現せず、また同社は南北石油へ合併され、同年十二月十日合併登記が行なわれている。同社の設立計画については同年八月十八日の〔福岡日日〕が概要を報道しているので、参考のためその記事を転載しておこう。

東京の浅野総一郎・大倉喜八郎・村吉吉兵衛諸氏を始め、京阪其他各地に於ける知名の実業家発起人となり、百五十万円の資本金を以て創立することに定まりたる東西石油株式会社なるものは、スタンダード石油会社・サミュル商会等の向ふを張り、米国に於ける某石油王が、原油のまま油槽船にて横浜に持来りたる物を、横浜にて精製したる後油槽汽車にて各地に輸送し、各主要駅には最寄に油槽を設け置きて、需要者が持来る適宜の容器に分売するの仕組とする筈にて、斯くすれば精製油一石に付九十七円宛の輸入税を免れ、更に一箱代米価にて約八・九〇仙、日本価にて一円二三十銭の失費を省くのみか、東洋汽船会社の特約により、航海奨励法によりて交附さるる保護金を其船舶によりて輸送さるる石油にも賦与する都合にて、旁旁余程低廉なる石油を内地に供給し得る設計にして、当市の太田清蔵氏も右発起人に加はり、其他市内実業者中に二、三千株を引受くることとなりしに就きては、当地に横浜製油場の分工場を設置し、関西地方に於ける供給の便宜を図る筈にて、其が為来月末頃には同会社技師当地に出張する都合なりと。

次に販売界のことに移ろう。

前前項で述べたように、一時九州の市場は露油のなすがままに任されている感さへあった。しかし三十一年米国スタンダードとの販売合戦に敗れ、一時九州市場はふたたびスタンダードの手に帰した。しかし三十年代の中ごろから、少しずつではあるが日本の石油業者も進出してきているようだ。

明治三十五年（一九〇二）四月九日の〔福岡日日〕広告には、浅野北越石油部門司出張所（同社は三十七年宝田石油に合併）と、同社の九州代理店で日本石油の外、内外石油も取り扱っていた博多蔵本町太田屋本店の店が見える。太田屋は二十八年六月大阪露油の特約販売所となっていたものだが（参照三、㈢末）、露油がスタンダードとの販売合戦に敗れた結果取引き先を変更したものと見える。また、三十九年九月初めには、日本石油卸商・博多上祇園町四番地・㊞本末商会が開店、錨印日本蝋燭・火止赤十字印石油を販売する旨の広告を出している。四十年十月三十日の〔福岡日日〕には、次の開店広告がある。

開店。専売特許岡田式副口金、竹火屋、安全火止旗印全勝石油。博多新川端町二十七番地、福岡市特約販売所、村松商店。

全勝石油とはどのメーカーなのか知らないが、どうも外油ではなさそうだ。

このような例はあるが、その勢力はまだ問題とするには足りなかった。

当時九州市場はスタンダードがほとんど独占（前述）していたのだが、その販売系統については、三十六年九月二十七日の〔福岡日日〕に次の記事があるので、これをもって説明に代えることとする。なお同社の販売網は、独占状態が続いたため安心したものか、明治四十年

代になって、ライジングサンおよび内国油が九州市場になぐり込みをかけるまであまり変ってはいないようだ。

米国スタンダード油会社に於て、門司・下関両港に対し石油の直輸入を開始したることは過般既報の如くなるが、同社鉱油部に於ては、又た門司に代理店を開設し漸次業務拡張の計画を為し、先づ同社長崎代理店、松本商店の名義を以て、頃日（このごろ）門司市西本町一丁目に開店したり。

（中略）同会社に於ては、従来横浜に日本本店を置き、神戸・長崎・函館・名古屋・台北・仁川の各地に支店或は代理店を置き営業中なるが、近来関門両港の位置重要を加ふるに随ひ門司に代理店を置くの必要を感じ、今回新設するに至れり。

本来鉱油部に於ても、門司に直輸入を為すの要あれども、今日は門司港に於る荷役の設備不完全にして、仲仕賃・倉敷料等の為に充分の利益を見る能はざるに因り、神戸或は長崎の輸入品を廻送し居れり。（以下略）

なお最後に、三十九年十月八日佐賀石油合資会社が創立十周年祝宴を開いていることと、四十年六月十四日の〔福岡日日〕に「門司市露月町三丁目、岸商店」の礦油販売店広告が掲載されていることを付け加えておこう。

(六) ライジングサン西戸崎製油所設立

四十一年（一九〇八）四月十一日の〔福岡日日〕に、次のような謝罪広告がのっている。

謝罪広告。私儀年来紐育「スタンダード」石油会社「アトランチック」印石油（上松）ノ品質優等販路広大ナルヲ利用シ、他ノ劣等油ヲ混合シテ上松石油ノ容器商標ヲ濫用販売シ、同会社及他ノ販売同業者ヘ迷惑ヲ及ボシタル處、直ニ同会社ノ為メニ告訴セラレ厳重ナル刑罰ヲ受ケントシタル段、今更慚愧恐縮ノ至リニ堪ヘズ。茲ニ真心悔悟該非行ヲ再ビセザル事ヲ誓ヒ、商標主ニ対シ謹デ謝罪ノ意ヲ表ス。久留米市通町十丁目、柴山重太郎。同市瀬下町、千原孫八。

このような容器・商標の盗用や、粗製濫造・表と内容の相違などは、他のあらゆる製品にもあったことで、明治初年から起こっている（江戸時代以前については知らない）。これは善意に解釈すれば、一日も早く欧米に追いつこうとする後進国日本人の願望の現れだろうが、このことがますます舶来品は上等だとのイメージを植えつける結果となった。九州地方が長い間外油に独占されたのも、内国油の主産地越後に遠いこともあったと思うが、外油の品質がすぐれていたことの外に、商標に対する信用も大きな力があったのではなかろうか。

四十年代に入ると、スタンダードの九州独占態勢は崩れ始める。しかしその原因は、内国油ではなく、ロイヤル・ダッチ・セル（英国系）のライジングサン石油株式会社の進出だった。

ライジングサン石油株式会社は、従来英国サミュル商会が行なっていた石油販売事業を譲り受けて、資本金四百万円の同社の子会社として、明治三十三年（一九〇〇）四月十一日横浜市に設立された。ここで、三、(三)「露油全盛時代」の項で述べたサミュルサミュル商会の子会社？大阪露油との関係がどうなっていたのだろうかとの疑問が残るが、これ以上の資料を持たない。

その後同社は、国内の各要地に油槽所を設けて精油の輸入販売を行ない、米油・国産油と対抗して各地で激闘を繰り広げ、次第にスタンダードの有力な対抗馬としてのし上がってきた。

同社が初めて福岡県に進出してきたのは四十一年（一九〇八）からのようだ。次に、同年五月十日初めて〔福岡日日〕に掲載された同社に関する広告の要点を掲げよう。

タンク石油指定販売広告

弊店ハ大英国ライジングサン石油株式会社長崎出張所ト筑後国一円地方ノ一手販売ヲ引受ケノ契約ヲナシ、左記営業所ニ於テ営業開始仕候。（中略）弊店ハ代弁店ヲ長崎市大波止納富回漕店ニ設ケ、海陸運

送共迅速ニ取扱可申候。汽車積ヲ以テ御便利ノ地方ハ長崎代弁店ヨリ直送、汽船積御便利ノ地方ハ深川汽船ヲ以テ御便利取扱可申候。空缶函ハ御便利能ク引受ケ可申候。（中略）

明治四十一年五月。営業所、筑後国大川町若津、タンク石油指定販売所、深川石油部。

右広告文から見ると、ライジングサンが長崎に出張所を開設したのは、同年初めのころだろうと思う。また、この石油は元長崎リンガ商会が取り扱っていた輸入石油を販売するようになったものだった。ここで久し振りにリンガ商会（三、㈢参照。二十六年にはリンカ商会とあるが、同一会社だと思う。）の名が出てくるが、同商会がどのような商社なのかは知らない。しかし、大阪露油の時も同商社輸入石油を引き継いでいることから考えると、サミュル商会と相当深いつながりがあったことだけは確かだ。

ライジングサン石油株式会社は、同年（四十一年）七月には直方町山部洲崎の改築停車場付近に直方支社を新築、同月五日開業式を行うなど、着々と販売網の整備に努めるとともに、同年春ごろ西戸崎に精油所の建設に着手していた。

精油所の工事は、六月末には工場全部の基礎工事を終わり、同月二十七日起工、八月には、スマトラから到着した建築材料および機械の一部を揚陸、翌四十二年（一九〇九）七月完成している。（渡辺福雄伝）によれば、同精油所の六千トンタンク十基の据え付けを行なったのは福岡市の渡辺鉄工所で、石川島造船所がこの工事のためタンク職人百二～三十人を応援させたと言う。

ライジングサンが精油所建設を思い立ったのは、三十九年十月実施された関税定率法が、四十四年七・八月に通商条約満期と共に有効期間が切れるので、政府は関税定率法改正法律案を作製したが、同案によれば精油の輸入は従価五割の重税を課せられることとなり、税率の低い原油を輸入して日本で精製する必要ができたためだった。なお同法律は、四十三年（一九一〇）四月十五日公布され、四十四年（一九一一）七月十七日施行されている。（岩波、近代日本総合年表）

精油所を西戸崎に選定した理由は、同社の（石油販売店広告）に、「今や博多は此石油の九州本場たらんとす」と書かれていることや、その他会社の九州支店設置状況から、それまで各社が九州の本拠地としていた長崎では地理的に不利なので、地理的に有利で且交通の要衝博多付近を選んだものらしい。当時博多付近で大船の碇泊が可能な港は西戸崎港しかなく、また同港は博多湾鉄道と九州鉄道（後の国鉄）の両社線を乗り継ぐ不便はあったが、とも角博多とも連絡していた。

ライジングサンが精油所を西戸崎に建設したことは、爾後同社の九州における商戦をきわめて有利なものとした。

ライジングサン石油は、精油所工事もほぼ完成したので、四十二年（一九〇九）六月八日の（福岡日日）に次のような開店広告を出している。

石油販売店開店広告

箱入・裸缶の二種。

西戸崎精油事業開始は旬日に迫れり。今や博多は此石油の九州本場たらんとす。

特色。品位優越、光力強大、煤煙稀少、容量豊富、価格低廉、消費寡少。

ライジング・サン石油の好評は他油を圧せり。

供給。新古容器及中味売の便法（ドラム貸付）アリ。

ライジングサン石油販売店、博多蔵本町弐拾番地、電話（四四五）

翌七月十日には、精油所落成と博多に販売店設置披露を兼ねて西戸崎精油所で盛大な開業式を行い、同年十一月十一日には福岡市東中洲町二一二番地に福岡支店を開設、以後同社は目ざましい勢で九州市場を

手中に収めてゆく。この開業時同社の精油所は西戸崎一カ所だけで、支店は福岡・下関・神戸の三店だけだった。これらの配置から考えて同社がいかに九州市場を重視していたかが分かる。

なお福岡支店は、四十四年十月中旬福岡市共進会跡に新築移転している。（新聞には、博多支店となっている。）

このようにして九州の石油業界は、激烈な競争時代へと突入した。その後四十四年二月ライジングサン石油は、宝田石油の程ケ谷製油所の一部を借り入れ、関東でも精油事業を始めている。

次に当時の九州地方における石油販売業界を知る参考として、四十一年七月一日現在の熊本税務監督署管内における、石油卸しおよび小売商の戸数を挙げておこう。

種別	熊本	福岡	大分	計
製造戸数	—	一	—	一
仲買戸数	五一	一一七	六八	二三六
小売戸数	四七九四	七四三四	二七五九	一四九八四

〈注〉前年同日に比較すれば、製造一戸・仲買八五戸・小売七〇九戸を増加。

製造戸数、福岡一は、ライジングサン石油会社。四十三年度後期門司市の石油商は三十四戸。

ライジングサンの精油所建設および福岡支店開設によって、スタンダードの九州における独占的地位は音を立てて崩れ始めた。同社ではその対策に狂奔しているようだ。次に挙げる二つの代理店開設は、その対策の一端だろうと思う。

▲明治四二、一〇、二六　福日広告

一、弊店儀此度紐育スタンダードオイル石油会社長崎支店ト左記特約致シ、大販売仕候間、多少ニ不拘御買求ノ程伏テ希上候。

尚北部代理店モ弊店同様ノ直段ニテ販売仕候間、御便利ノ場所ヨリ御購求被下度候。

一、紐育スタンダードオイル石油会社発売石油一切。

三池郡一円一手販売特約店、筑後大牟田有明町、野田由太郎商店、長電十一番。

北部売捌代理店、三池郡江浦村、古賀民蔵商店

▲明治四二、一一、一一　福岡区裁判所登記

博多石油合資会社設立

△本店、福岡市石城町一丁目二五番地△目的、紐育スタンダード石油会社下関支店ノ取扱フ石油及礦油ノ販売業ヲ以テ目的トス。△社員ノ住所出資ノ種類価格及責任。・福岡市行町二番地、金五千円、有限責任、園田小七・下関市豊前町一三〇番屋敷、金五千円、無限責任、児島喜輔・同市観音崎町三九番屋敷、金五千円、有限責任、古賀彦次郎・福岡市行町二番地、金五千円、無限責任、園田小太郎

同社はこのころ熊本にも代理店を開設しているが、これらは当時としては可成設備の整った油槽所だったようだ。

また同社は競争の便宜上長崎支店を下関に移したが、その後大里小森江（現北九州市門司区）に送油管を建設、四十二年十二月末ころ大里に倉庫事務所を設けて下関支店を引き揚げている。

(七)　販売政策と市況

ライジングサン石油が、明治四十一年（一九〇八）ころから九州市場に進出、更には四十二年七月西戸崎精油所を建設九州市場の主導権を握ると、米国スタンダードもただちに反撃、九州の石油業界は激しい競争時代へと入った（参照前項）。ライジングサン石油と同じころ、日本石油・宝田石油の大手二社も、本式に九州市場開拓に乗り出してきているようだ。内国石油の政策は効を奏し、従来ほとんど外油によって占拠されていた九州市場も一時はその全消費量の三割を国産油で占めるまでになった。　しかし内国油の九州進出は時期が悪かった。

それは、外油の激しい競争と不況だった。

不況は四十年に始まり、四十一年後半には深刻さを増し、四十三年まで続いた。その不況による需要減退の中で、元売り会社が販売量をふやすために過度の石油を販売店に押しつけた結果、四十三年（一九一〇）秋には市中の在荷は平素の三倍程度に上り、この過剰在庫と販売競争による値下げと相待って、灯油価格は十八リットル入り一缶が二円を割るまでに低下しているようだ。値崩れは全国的な問題だったので、四十三年二月から九月にかけては、内外大手四社間に販売協約が結ばれ違約金制度も設けられている（実業之世界社、明治大正史経済篇）。しかし九州では、実質的には守られていないらしい。

四十四年（一九一一）に入ると、幾分景気も回復して需要が上向きとなったこともあり、さしも激烈をきわめた商戦も一時的に平静さを取り戻し、二月には最低値から七～八十銭引き返している。しかし過剰在庫は市価を圧迫、更には油界の暗闘が再開、市価の低迷は同年八月ころまで続いた。次に、「軽油稀有の停滞」と題した、四十四年八月十六日の（福岡日日）の記事から、当時の状況を見てみよう。

油界の暗闘漸く激甚となり、油価は表面の建値に似ず益益安値を告げつつある為め、之れが混合用としての軽油需要は益益減少の傾あり。加ふるに発動機用としての売行も大馬力ものは総て石油を需要し、唯少馬力ものの需要あるに過ぎず。之れとて諸小工業の不振と共に其の消費分量極めて寥寥たるより、此處に軽油は勢ひ在荷停滞を告ぐる事となり、現在市中各倉庫に充満せるもの総数十四・五万函の多きに達せり。

斯くの如きは近年稀なる停滞にして、同時に日本・宝田両社を始め一般当業者に在りては、目下之れが売捌に腐心しつつあれど、何分にも石油安の折柄とて格好の消費口なき為め、今は唯極力現品を持堪えて時期を待つの外なく、随って黙黙の裡に価格の協定を為し居れるが、然も販売業者側に於いて金融関係の競争売りを煽めざるより、相場は有って無きが如く、昨今先づ免税品二円七銭一分五厘・二円四十五銭一分・二円五十五銭見当を唱へ居れり。

而して越後地方の礦油製造家は、此軽油大不況の為め直接の打撃を蒙り、製造せば益益損失を大にする為め、目下殆ど製造全体の姿となり、本月初原油十五銭下げの実行を見しも、更に景気を挽回するに至らずと云ふ。

なお、不況を通り抜けた四十四年（一九一一）末、内国油の九州における占有率は一割四分程度まで下っているが、外油の販売量は減らなかった。すなわち内国油だけが、販売競争と不況の影響をもろにかぶったわけだ。

ライジングサンとスタンダードとの販売合戦は以後も続けられ、その間にあって内国油はひとり苦しめられねばならなかった。次に挙げる会社は、この競争の中でス社がラ社に対抗するために設立した会社だと思う。

△筑南石油合資会社（明治四五、三、二二、支店設立登記。甘木区裁判所）

△本店。筑紫郡二日市九五八△支店。朝倉郡甘木町甘木一五四九△目的。米国紐育スタンダード石油会社製油ノ委托販売業△設立。明治四四、九、二五△代表社員。園田小太郎△社員。三千円出資、無限責任、福岡市行町五七、園田小太郎・一千円出資、有限責任、筑紫郡二日市九七〇、谷梅次郎

〈注〉代表社員園田小太郎は、前項末で述べた同じス社の販売会社、博多石油の無限責任社員となっている。

石油価格は四十四年（一九一一）秋口から回復し始めるが、翌四十五年二月に入ると急激に上昇へと向った。この時の価格上昇は全く気狂いじみたもので、同月一日から二十日までの僅か二十日間に三回も値上げを行い、その勢いを持続したまま大正へと突入する。当時の状勢については新聞記事をもって説明に代えよう。

▲石油価格益　強硬（明治四五、五、八、福日）

一ヶ年中の最不需要期にある昨今の石油市場は、荷動き捗捗しからざるに似ず市価は益強硬を続け、前日米油の値上に次ぎ内国油また遠からず値上を行はんとし、実に未曽有の高値を現はし来れり。

コハ英国の罷業（スト）復業後も需要の著しく減退せざるに由るものの如く、原油のまま米国等より輸入さるる結果、単に灯油のみならず軽油・機械油類までも供給不足を訴へんとするに至り、市価強硬を極め居れば尚此上多少の引上は免れざるものの如し。

目下上松の建値は四円三銭にして、当地実際取引値は三円八十八銭なり。ラ社は之より十銭下げ、内国油は二十銭下げと云ふ有様にて、各油間の値鞘は次第に縮少し、内国油の如きは殆ど品払底とも云ふべき状況となれり。這は市価の騰貴により据物の需要多きと、産油減退の証據なるが、近日既に斯る状況なれば、七月以後需要期に近づくに至らば或は一層高値に進むべく、所謂外油間の協定なるものも内国油にして無勢力なる今日にては全く空文に属し、益外油の自由活動を傍観するの外なかるべしと。

▲石油界活躍の原因（同右五、一八）

不需要期に於ける石油界昨今の活躍は当業者の甚だ意外とする處にして、不時の高直に驚き手控へ居りし向は、在荷の窮乏と共に高直品を買付けざるべからざるに至り、狼狽を極め居れり。

外油が今日の好勢を来したる原因は、第一は英国炭坑罷業の結果重油を燃料に供給するに至りしため、英米油共本国において市価の暴騰を来し、今日罷業後と雖も尚ほ続いて少からざる需要あると、一は丁抹人により発明されたる洋燈の使用漸次増加し、点火用として電灯・瓦斯を駆逐せんとする勢あるに至りしことなり。右洋燈によれば、百燭光の洋燈一個の使用石油は一昼夜を通じ僅五合にて足り、電灯・瓦斯の欠点を補ふのみならず、極めて経済的なるため、其使用の増加を来したるものにて、一時的原因により爆発したる市価は、漸進的需要により歩調益益堅固となり、到底目先低落の余地なきに至れり。

元来本邦市場にありては、微弱ながら内国油の増加により外油の威を擅にする能はざりしに、近年内国油の減退により市場は殆ど外油の自由となり、連れて市場は全く世界の大勢に支配され、本邦特有の市価を保つ能はざるに至れりと。

明治末の九州いや日本の石油界は、電気ガス事業の発展によって都市部のランプ用灯油こそ減少したが、大衆の収入増加によって郡部にランプが普及し、ランプの使用時間増加、更には熱用・工業用石油の販売増加もあって、販売量を増加、そのため代理店も専業化してきているようだ。今日九州大手石油販売会社の一つに数えられている株式会社喜多村石油本店が、初めて久留米市瀬ノ下町通町に開店したのが明治四十四年十月であることも、何か大きな歴史的意味がある気がする。

なお喜多村石油は、〔喜多村石油本店五十年史〕によれば、喜多村成人・道人・民人三兄弟が、それまで勤めていた同所千原孫八商店を継承したもので、千原商店は、前項初めに挙げた広告その他から考えて、小さな石油小売店だったものと思われる。

最後に付け加えておかねばならぬ大事な事がある。それは、前掲新聞記事末尾にあるように、日本の石油市場が、明治末になって、世界の石油市場の一部としてしか考えられなくなったことだ。明治初めのように、石油の需要が少い時代はまだよかった。その後ランプの普及によって需要は増加したが、内国油の産額増加によって、直接間接に外油価格を束縛してきた。しかし、明治末内国油の産額が減少すると、日本市場はもはや自主性を失った世界の中の一市場にしか過ぎなくなってしまった。

（完）